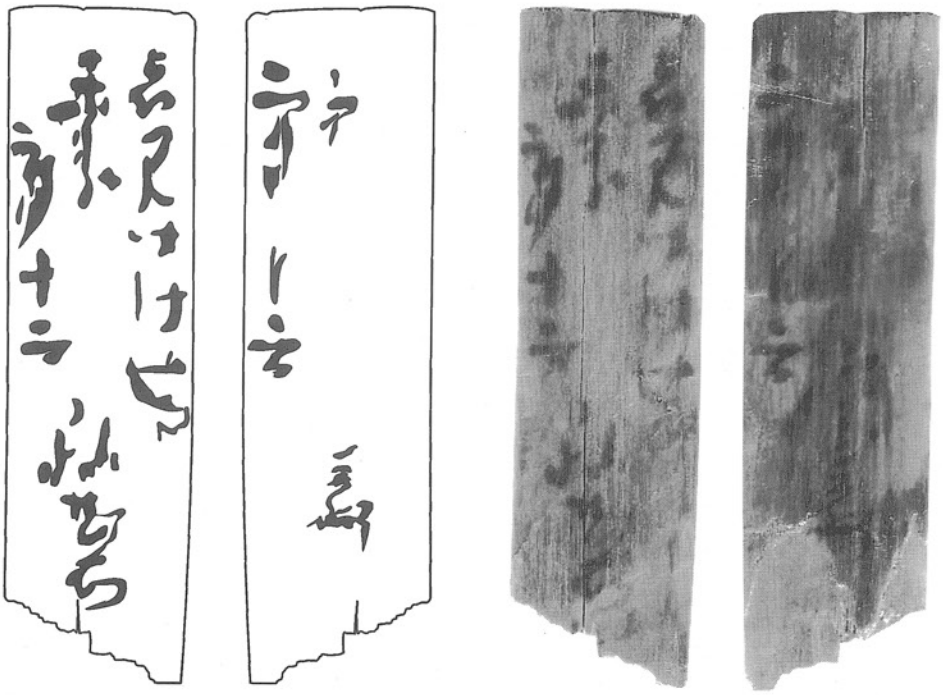

木簡の再検討と地域社会の展開

滋賀県立安土城考古博物館での木簡展示に伴って、展示図録『古代地方木簡の世紀―文字資料から見た古代の近江』（同博物館、二〇〇八年）が刊行された。

西河原地区に展開する古代遺跡を「西河原遺跡群」として捉え直し、詳細な再検討を行なっている。そして、西河原遺跡群は「野洲郡衙もしくは評衙としての役割を担っていたと考える」（九一頁）とする。首肯すべき見解であろう。

また、西河原森ノ内遺跡の郡符木簡（一号木簡）は第四遺構面第四段階の溝SD二二〇一からの、条里記載木簡（四号木簡）は同溝西側遺構面からの出土で、四号木簡は「条里坪付に関する記載であることからも八世紀前半以降のものと考えられる」（八七頁）とする。第四遺構面の年代は七世紀後半から八世紀前半以降と解し得るが、終期を何時とみるかによって、近江における条里呼称の成立などの問題に関わることになる。

木簡は、単独ではなく出土遺跡の理解や、さらに周辺遺跡や出土遺物との総合理解が重要である。西河原遺跡群のような成果は、今後他の遺跡群でも期待できるであろう。

（岩本次郎）